

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶 ⑦

黄金色になった田んぼの小径を歩いてきた。

一步踏み出す度にイナゴが四方八方に跳び散る。小学生の僕は、それが面白くて草むらをドサドサ歩く。すると、突然ショウリョウバッタが高く跳んだ。

遠くに奥羽本線の赤い機関車が貨物車を長く連ねていて、晴れた青空には随分前の飛行機雲が残っていた。

のぼりだけが薄ぼんやり明るい稲荷神社の方からバイクが近づいてきた。

バイクに乗っていたのは、機関区帰りの父だった。

「まんま食ったかあ」と父はおもむろに聞いた。

「んん食ったあ」

「二杯以上食ったかあ」と、間髪入れずに聞く。

（まんま食ったかあ）は、この地域の大人たちが子供に掛ける言葉だ。

食べるのが大変だった東北地方の昔の名残言葉であろう。

「んん食ったあ」と僕が鼻をこすりながら答える。

「んがあ」と父は呟くと、グイーンという音を残してバイクで去っていった。

イナゴは驚いて、またいつせいに跳んだ。

それから随分月日は流れた。僕はもう、その頃の父の年齢を越えている。

しかし、田んぼで子供に（まんま食ったかあ）と話し掛けはしないだろう。

そして、奥羽本線に貨物列車が走ることもない。今は銀単色の新幹線に代わっている。

でも、黄金色の田んぼの小径を歩くと、昔とほとんど変わらなない。

一步一步踏みしめる度に、イナゴとバッタが勢いよく跳び散るのだ。